15～17世紀南九州地域の権力・交流・都市

大阪市立大学大学院文学研究科　後期博士課程3年　兒玉良平

研究の背景・目的・方法

従来の日本史研究においては、南九州地域や北東北地域など、列島周縁部に位置する地域は、「後進」的であると位置付けられることが多い。しかし、これらの地域、中でもとりわけ15世紀後半から17世紀初頭（日本における中近世移行期）の南九州地域は、日本列島とアジア海域世界の境界に位置し、強い国際性を帯びていた、いわば日本列島の「最先端」の地であった。同地域には、海上交通を通じた交易本位の社会が成立しており、大名・国衆とよばれた有力な武士たちも、外国との通交や交易を通して発展を遂げたと考えられよう。

本研究は、中近世移行期南九州地域をフィールドとして、大名・国衆とよばれる武士たちの海洋活動のあり方や、都市形成の歴史を検討するものである。とりわけ、対外交流への関与が権力のあり方や社会構造にどのような影響を与えたのか、また対外交流を行うための「場」であった城下町や拠点港の空間構成について解明をめざす。以上の検討から、日本列島とアジア海域世界との接点としての南九州地域の「先進」性を見出し、積極的に評価する。また、こうした取り組みを通じて、むしろ「先進」「後進」といった価値基準から離れ、新しい中世日本像の創出にいたる方法を提起する。

手法としては、文献史料の分析を中心としつつ、地図・地名、発掘成果、石造物、民俗慣行などにも注目し、フィールドワークを取り入れてゆく。

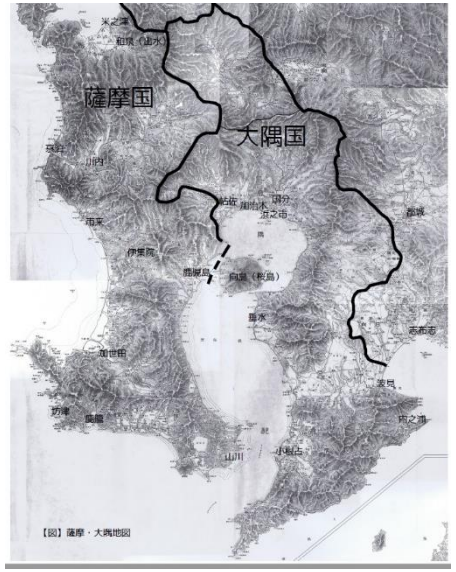
研究成果・課題

報告者は、採用年度である本年度（2022年度）において、以下の2点から研究を進めた。

まず、中近世移行期における、薩摩・大隅国（現鹿児島県）の大名権力であった島津本宗家の政治拠点について、その変遷と各拠点の空間構造の概要を検討した。その結果、多くの拠点が鹿児島湾岸の港湾に隣接して建設されたこと、それらの拠点を通じて島津本宗家が海運・対外交流の掌握を図ったことを明らかにした。

次に、同時期に島津本宗家の拠点港湾として機能した、薩摩国山川（現鹿児島県指宿市）の港湾としての発展の様相を段階的に検討した。その結果、山川が16世紀以降に、南蛮船来航や島津本宗家の政策を契機に、にわかにその地位が向上し、島津本宗家領内随一の港湾へ発展したことを明らかにした。

本プログラムの支援期間は本年度で最終となるが、今後の研究の展開の上では、武家権力にとどまらず、禅宗などの仏教、あるいはキリスト教など、国内外の宗教勢力の動向を合わせて検討することが必要となろう。



◂山川正龍寺跡石造物群
（2020.12.08　兒玉撮影）